向日葵の決意

あの日、僕の家で大火事が起きた。木造家屋は数分もたたずに崩れ落ち、家の中にいたはずの僕は、気が付くと自分の絵を一つ抱えて家の外に座り込んでいたという。助けに来た村人に教えられた。彼らのいうことには、消火作業をし始めたころ、一人の男が炎の中から飛び出してきた。彼は放心状態の僕を発見すると、大股で歩いてきて、

「この化け物が！　もう俺にはお前が理解できん」

と叫びすぐに去っていったという。僕は、村の食堂の女将に一時的に居候させてもらうことになった。

「ヴィンセント、気分はどう？」

女将――ハンスというのが愛称だ――がそっと部屋のドアを開けた。ぼうっと窓際に飾った向日葵の花の絵を眺めていた僕は、少し驚いて彼女を見た。

「ええ、まあ」

ハンスはそう、と呟くと、テーブルに朝食を置いて

「今日はお客さんが来るからね」

とだけ言って部屋を出ていった。彼女はこの村でもかなり人気の女性だ。雪のような肌に、異国風のターバンがよく似合っている。動くたびに頭から長く垂れている黄色の布が生き物のように揺れるのが、僕はなんとなく気に入っている。まだ見たことはないが、彼女は絵が好きで趣味で描いてもいるらしく、画家である僕のことを以前から何かと気にかけてくれていた。

突然の大火事と、向日葵の絵。そして共同生活をしていた友人との絶交。当時は混乱のため思い出せなかった、いや、思い出そうとしなかったことが今では鮮明な映像として再生できる。

「僕のせいだ……」

激しい口論――友人も僕と同じく画家だが、芸術的な面でどこか相容れないところがありよく喧嘩になった。彼の発した恐らく非常に感情的な罵倒に、僕の怒りが爆発する。……そして、視界に広がる炎と、友人のおびえた顔。

ふと手近にナイフを見つけた。ハンスが用意してくれた、パン切ナイフだ。『向日葵』を破壊したい。そんな衝動が起き僕はキャンバスを裂くには少し頼りないそれを振り上げる。しかし、

「おっと、そうはさせないよ」

見知らぬ声がして、腕をつかまれた。振り向くと、端正な顔立ちの男性が微笑んでいる。この村では見たことのない人だ。彼は僕の手からそっとナイフを抜き取り、そっと床に転がした。

「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ君だね。この『向日葵』は置いておいたほうがいい。なかなかに素敵だ」

彼はハンスの言っていた「客」だろうか。青を基調とした上品な服装から、ひょっとして貴族なのではないかと思案する。

「あの……誰ですか」

恐る恐る尋ねると、彼は絵を眺めながら言った。

「私はクロード・モネ。君と同じく、画家だ。……うん、確かにこの絵はそうだな……」

モネは何か納得したのか小さく頷くと、僕に向き直る。

「君に話があるんだ」

僕は彼に対して不信感しかもっていなかったが、とりあえず椅子に掛けた。モネは窓際の壁にもたれかかると口を開く。

「――君は、いわゆる『ルネサンス四大巨匠』を知っているか？」

思いがけない問いに、僕は拍子抜けした。しかし彼はあくまで真剣な表情なので、慌てて頷く。

「もちろん！　レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ・ヴォナローティ、サンドロ・ボッティチェリ、ラファエロ・サンテ

イ……この四人ですよね。有名ですから、画家になる以前から知っていました。で、それがなにか……？」
モネは、部屋には僕らのほかに誰もいないにもかかわらず声をひそめた。
「実は最近、世界各地で彼らが目撃されているんだ」
「？」
ルネサンス四天王たちが活躍したのは何世紀も前のことのはずだ。当然皆亡くなっていて、墓もちゃんとある。
「彼らは何者かによってよみがえらされたと言われている。そして、再び自分たちの時代を築こうとしているらしい。まっとうな芸術活動ならばまだいい。彼らは、異能力で『今の芸術家たちを排除または自分の崇拝者とすること』をその手段としている」

○

世の中には、異能力を持つ芸術家が多数存在する。並々ならぬ感情を込めて制作した絵画や彫刻などは、いつしか魂を持つようになる。そして製作者に非常に忠実な「異能力」として発現するのだ。異能力の中には戦闘用としての効果を持つものもあるが、平和主義な芸術家たちによって大抵は観賞用としてのみ使用される。
ルネサンス四大巨匠は、史上最強の異能力集団と言われている。もちろん当時は自分の利益のために異能を使うことは一切なかった。

○

「彼らは元々この時代に生きているべきではない人々だ。無理によみがえったことで非常に不安定な存在となっている。このままでは芸術家たちが危険だ――そこで、私は彼らをあるべき場所へ還すために自分の異能を持って戦うことを決意した」
モネの透明な青い目が僕を見つめた。僕は彼が何を言わんとしているかをぼんやりと悟り、うつむいた。
「君も異能力を持っているだろう。しかも強力な……どうだ、私の仲間になってくれないか」
「お、お断りします！」
僕はそれだけ叫ぶと、部屋を飛び出した。どうして、今なんだろう。一階の食堂まで駆け下り、込み合う中を外へ出ようと急ぐ。
「ヴィンセントどうしたの？　クロードと話した？」
ハンスの声を背中に、僕はようやく建物の外へ出た。そのまま裏に回ると、しゃがみ込む。
「僕は、もう異能を使わないんだ……」
友人を傷つけるような異能力など、自分で制御できない異能力など使ってはいけない。彼は僕の初めての画家仲間だったのに。涙が地面に落ちる。
「ヴィンセント」
ビクッとして振り向くと、モネが腕を組んで立っていた。
「な、なんですか！　僕は絶対に異能力を使わない。あなたの仲間になって戦うなんて嫌だ」
「あの火事が君の異能によるものであること、それを君が気にしていることは既に知っている。ハンスが気づいて教えてくれた。しかし、その上でスカウトしたんだ。いいかい、危険なのは巨匠だけではない。世界中に存在する彼らの崇拝者も同様だ。こちらが攻撃しなくても、向こうは放っておいてくれないよ。それでも『使わない』と言い続けられるかい？」
諭すようなモネの言葉に、僕は口をつぐむ。僕の言うことは彼には理解してもらえないのだなと考えた。
「あ、なんでもないですから、気にしないでください」
突然モネが後ろを向いて言う。そこには一人の農夫が立っていた。腰は曲がり、麦わら帽子を目深にかぶっていて顔が見えない。

村にはよくいる見た目の人だ。彼は何も言わず片手を上げる。
「えっ」
その手は、苔むした木の枝に見えた。
「っ、お前は……」
モネの表情が厳しくなった。男はその「手」を頭にやると、帽子を取る。
露わになった顔を見て、背筋が凍った。凹凸の多い顔だなと思ったら、なんと果物や野菜、無数の花や枝、本やペンまで、様々な物質が複雑に絡み合って一つの顔を形作っていたのだ。それらは絶えずもごもご動いており、なんとも不気味だった。果物の一部は既に腐敗しているらしく、蠅が数匹飛び回っている。
「巨匠の崇拝者の一人、ジュゼッペ・アルチンボルドだ。代表的な異能力は連作『四季（クアトロ スタジオニ）』。体の一部を果物や野菜、花に変える」
モネは声をひそめて言う。
「こんな時に敵が現れるなんて……！」
奴の顔に横向きについている二本の胡瓜――恐らく唇だろう――を開いた。中からトウモロコシのような、というかそのものの歯がのぞいている。
「サガシタ。オマエラ、ワレワレノテキ」
少しこもった声だ。顔じゅうのパーツが先ほどより激しく気味悪く動く。
「既に知られているのか……」
モネが狼狽した。
「あ、あの！　僕は別にこの人の仲間というわけではない…かな？　そう、無いので。えっと、攻撃の意思もな」
「ヴィンセント避けろっ！」
モネの叫び声も既に遅く、アンチボルドの不気味な寄せ集め顔が目の前に迫っていた。
「うわっ！」
一瞬視界が真っ暗になる。次に見えたものは、先程と同じ場所に立ちこちらを見つめるアルチンボルドの姿。
「『四季（クアトロ スタジオニ）――『秋（アウトウンノ）』」
ボトリ……
何か柔らかいものが地面に落ちたような、鈍い音がした。今日る京る足元に目をやると、そこには熟れてパックリ裂けた柘榴の実。少し潰れ、赤い汁が地面に染みていた。
「ミミデヨカッタネ」
くぐもった声が笑った瞬間、
「っ、あああああああ!?」
突然、側頭部あたりに刃物で刺されたような激痛が走る。反射的に手を当てて僕は驚愕した。
耳が、無くなっている――そっと手で探ると、えぐった後のように変形した皮膚に、小さい穴が開いているのみだった。痛みは消えず、僕は呻きながら膝をついた。
「ヴィンセント、しっかりするんだ！　すぐに次の攻撃が来るぞ、おい、聞こえてるのか!?」
焦ったようなモネの声が遠くの方に聞こえる。冷や汗と涙が頬を滝のように流れる。恐怖と痛みで体が動かない。
『冬（インヴェルノ）』
アルチンボルドの声がした。攻撃が来る。しかし、反応することができない。
完全に縁を切るはずだった異能力に殺されるなんて、皮肉だ。なぜ僕がこんな目に……。
「ぐぅっ」
すぐ近くで、うめき声がした。そしてドサリと崩れ落ちる音。

ハッとして顔を上げると、目の前に、モネが横たわっていた。
「モ、モネさんっ！」
端正な顔が苦痛にゆがんでいる。見ると、腕が枯れ木に代わっていた。しかもそれは徐々にミシミシと音を立てながらモネの体を侵食していく。
「ヴィンセント……奴を倒せ。このままでは二人とも殺されてしまう」
「でも僕は、」
言いかけて、口をつぐんだ。この期に及んで、なに我儘を言っているんだ僕は！　彼の言う通り、ここで僕が戦わないと――モネはかばってくれたんだ！
「君は異能力を恐れているが……」
「しゃべらない方がいいです」
僕は立ち上がって敵を睨み付けた。アルチンボルドは手で頬の林檎を撫でた。
「オワリダ。オマエモ、ソイツモ」
「黙れ！」
すさまじい熱気が僕を包んだ。体の内から無数の脈動を感じる。それらは腕、腹、背中などに凝縮し、皮膚を破った。大きな影が僕を覆う。
「オマエ、ナニヲ」
敵の表情が歪む。薄緑色の茎が伸び、僕の周りにいくつもの大輪の黄色い花を咲かせた。まるで太陽のようなそれは
『向日葵（ソネブルム）』‼
次の瞬間、一つ一つの花弁が炎に変化する。そして、目にもとまらぬ速さでアルチンボルドめがけて伸びていった。
「ッ、『夏（エスターテ）』‼」
奴の異能力により花が次々と野菜になり落ちたが、それよりも僕の向日葵は圧倒的に多いし速い。アルチンボルドの木の実の目が見開かれる。
「グアアッ」
野菜と草木の焼ける匂い。炎の花に包まれ、先ほどまで余裕を見せていた異形の者はもだえ苦しみ続けている。
「……燃えろ」
体に力を入れると、炎の勢いが一段と強くなる。やがて奴は地面に倒れ伏した。
「もう大丈夫だよ」
肩をポンと叩かれ振り返ると、モネが微笑んでいた。
「モネさん！　腕が元に戻って……」
「君の耳もだよ。奴が倒されたから、異能力の効果も解除された」
そういわれて改めて顔の横をまさぐると、ちゃんと耳がついていた。安堵のため息をつく。落ち着いた拍子に、『向日葵（ソネブルム）』は消え去っていた。
「お、い」
アルチンボルドがゆっくりと立ち上がった。火傷により腫れているが、驚くことに顔は普通の人間、彫りの深い老人になっている。
「お前、まだ！」
緊張が走る。しかし、攻撃はこなかった。奴が数歩足を出すと、顔から何か小さいものがふつふつと出現していく――花だ。マーガレット、ペチュニア、デイジー、カーネーション……。ありとあらゆる花が顔一面に咲き誇る。花が全てを覆い隠す。
『春（プリマヴェーラ）』……」
彼の呟きと同時に、花が一斉に舞い散る。その光景はまるで春の幻想のように美しかった。花吹雪が収まると、アルチンボルドの姿は跡形もなく消えていた。

○

「見事な向日葵だったよ、ヴィンセント君」
食堂に戻ると、モネは言った。かなりの騒ぎだったが、ハンスが酔っ払いが暴れているとごまかしてくれていたらしい。ここはいつも騒がしいので、皆あまり外の音は耳に入っていなかったようだが。
「いや……、ま、お役に立てたようで」
僕は湯気を上げるコーヒーを見つめる。アルチンボルドに向日葵が向かっていく景色が、友人との決裂の場面を思い起こさせる。
「僕も異能力を使おうと思ったんだけど。でも君の能力を見るいい機会だったね」
くつくつと笑うモネを見て、僕は少し違和感を持った。
「もしかして、わざと使わなかったんですか？」
彼はぎくりとした表情を浮かべて目をそらした。不自然に口笛を吹き始めたところに、同じ問いをぶつけると、ついに
「えっ？　えーっと、まあそう……かな？」
しどろもどろに白状した。
「危ないじゃないですか！　生きるか死ぬかの瀬戸際で、よくそんなことができたもんだ‼」
僕がどれだけの恐怖を味わったと思っているんだ、と責め立てるとモネは困ったように手を体の前で振った。
「でも私は、君なら奴を倒せると思っていたよ」
「……」
彼はあごの下で指を組んで、真剣な目つきになった。
「君は非常に強力な異能力の持ち主だ。しかし、まだそれを使いこなすまでには至っていない。今回はうまくやったが、次に同じような目にあったときは分からない」
そこで一旦言葉を切って、
「自分の能力を制御すること――君には必要なことだ。辛いと言って向き合うのをやめては、また誰かを傷つけてしまうことになる」
今回のモネのように（わざとだったが）、僕が動かないせいで誰かが犠牲になることがあるかもしれない。誰かと戦うだけではなく、誰かを助けることも、異能力ならできるかもしれない。それならば
「モネさん……僕、あなたと一緒に行くことにします。異能をコントールできるようになりたい。まだ未熟者ですが、モネさんの目的である四大巨匠についてのことも、できるならばお手伝いしたい」
それを聞いたモネの笑顔は、両親が僕に見せていたような優しいものだった。
次の日の朝、僕達は荷物をまとめて村の入り口に立っていた。見送りはハンス。たくさんの保存食を持たせてくれた。
「私も行きたいけど、食堂があるからね。まあ、行ったところで力になれたかは分からないけど」
彼女はそう言って肩をすくめた。
「ヴィンセント、きっと大変な旅になると思うけど、無理しないでいくのよ。モネは強いから、たくさん助けてもらいなさい」
モネは彼女の言葉に苦笑すると、別れの挨拶をして歩き出した。その後を、僕は慌てて追いかける。
「気を付けて」
僕は返事代わりに手を軽く上げた。
村からかなり離れたあたりで、モネが話し始めた。
「昨日も少し話したが、四大巨匠たちは何者かに生き返らされた可能性が非常に高い。私たちは、最終的にその黒幕を倒さなければいけないだろう」

木が両脇に生える石畳を並んで歩く。木漏れ日が心地よい。
「死者蘇生の異能力を持つ、ということですか？」
「まあ、そうなるな。自然の摂理に反する異能力だ。その使い手は絶対に今の私たちでは敵わない」
僕はアルチンボルドとの戦いを思い出した。これから出会う敵は、彼よりずっと強いだろう。一刻も早く異能を使いこなせるようにならなくては。僕は思わず握りこぶしに力を入れた。
「仲間を集めなくてはね。世界には様々な芸術家がいる。まずは私の友人からあたってみるか……」
モネはポケットから地図を出して、今歩いている道に指を添わせた。そして、もうすぐだ、と明るい声で言う。
かくして、僕たちの長い旅は始まりを告げたのであった。